

本書の特色

①定評ある、分かりやすい『素問』解説書  
原書『黄帝内経素問訳釈』は、中国で定評があり、最も普及しているポピュラーな解説書。中国の中医師のほとんどが学ぶコンパクトなテキスト。入門者が『素問』を学ぶ上で理想的な内容である。翻訳をする、全3巻と大部の書籍となったが、『素問』学習には最低限必要な内容である。

②『素問』読解の完璧なスタイル  
「運氣七篇」を含む全八十一篇の全てに「解題・原文・和訓・注釈・現代語訳・解説」を付す。『素問』を総合的に理解するための、かつてない丁寧な構成。原文は王冰次注本をもとに校訂したもの。  
③最高の翻訳・監修チームによる精根込めた翻訳と和訓

東洋医学文献の翻訳に、中国学研究者に参加いただいたのは画期的である。東京大学文学部前学部長・戸川芳郎教授のご理解とご好意により、同中国哲学研究室の第一線の優秀な学者二名が翻訳にご参加いただいた。全体の監修に、中国学の研究者の立場から中医学を専門に研究されているこの分野の第一人者・九州国際大学石田秀実教授が精根込められた。

④今日の標準的・代表的和訓  
和訓は、古今の『素問』研究の成果を吸収しながら、独自の観点で付しており、今日望みうる最高の和訓である。『素問』を読むための標準的・代表的和訓。  
⑤読みやすい上下二段組  
原文は十五級明朝の大きい文字を使用、原文と和訓を上下二段組みにしてあるので、対照して学ぶことができる。

現代語訳

黄帝内経素問

全三巻

原書：『黄帝内経素問訳釈』第一版 南京中医学院医経教研組編  
上海科学技术出版社 一九八一年刊  
内容：「上巻」・重広補註黄帝内経素問序  
黄帝内経素問序（啓玄子王冰撰）

第一～三十篇（上古天真論篇～陽明脈解篇）  
【中巻】・第二十一～六十五篇（熱論篇～標本病伝論篇）  
【下巻】・第六十六～八十一篇（天元紀大論篇～解精微論篇）  
運氣七篇と遺篇二篇を含む

体裁：A5判 上製 函入 縦書 上下二段組

全巻完結！

【上巻】 五二二頁 定価一、〇〇〇円（税・送料共）  
【中巻】 四五八頁 定価 九、八〇〇円（税・送料共）  
【下巻】 六三六頁 定価一三、五〇〇円（税・送料共）  
【全三巻】 総定価三四、三〇〇円（税・送料共）  
◆索引は、別冊で制作中です（別売）。

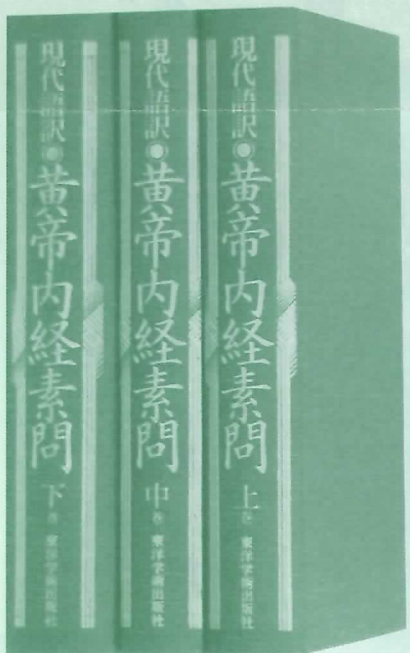
◆「下巻」出版記念特別価格

一、〇〇〇円（税・送料共）  
（下巻のみの特価です）  
特価期間：一九九三年一〇月二〇日まで（消印有効）  
●最後の購入チャンスです！ 早めにお求め下さい。

全三巻完結——今甦える  
東洋医学の「知」の源泉！

【原文・和訓・注釈・現代語訳・解説】

- 翻訳 [上巻] 島田隆司、庄司良文、鈴木 洋、藤山和子  
[中巻] 石田秀実、勝田正泰、鈴木 洋、兵頭 明  
[下巻] 石田秀実、松村 巧
- 監訳 石田 秀実（九州国際大学教授）
- 編著 南京中医学院医経教研組



現代語訳 ● 黄帝内経素問 全三巻

東洋学術出版社

〒272 千葉県市川市宮久保3-1-5  
電話 (0473) 71-8337  
FAX (0473) 72-7060



## 伝統医学の柱 双手を挙げて推挙する

東洋医学を構成している柱は、『傷寒雑病論』『内経素問靈樞』『神農本草経』の三本で、なかでも『内経素問』は基礎理論の宗祖といわれている。戦後日本における内経研究はめざましい。

このたび、東洋医学の古典に造形の深い、石田秀実助教が、『内経素問』に精魂を傾け、平素『素問』に傾倒している優れた七人の協力者を得て、初学入門者に、最も適切な、分かり易く、親しみ易い、しかも格調の高い『現代語訳・黄帝内経素問』を発行された。双手を挙げて、これを推薦する次第である。



東亜医学協会会長  
矢数 道明

## 本邦における唯一無二の 『素問』解説書

七年の歳月を費やし、東洋医学最高の古典解説書として中国では夙に定評ある『黄帝内経素問訳釈』が翻訳出版されることになった。原書は現中国で活躍する中医学の指導層達、入門時に熟読したもので、今日の彼らの深い学識は本書に負うところが大きいと聞く。本邦における唯一無二の解説書としての将来性も斯くあるならんと思惟する。

本書は、周知の石田秀実先生の監訳と八名の群雄に依る翻訳によって結実した。内容の特色と相俟って古典勉学者各層各位の座右書として足るを辞めません。少輩の希求、此処に極まった感をこめて敢えて推薦する。



日本経絡学会会長  
岡田 明祐

## 緻密な文献研究を 背景に完成した翻訳

古医書にそそぐ中国の研究情熱は「古為今用」のモデルだ。巨冊『医古文』課本は清代新疏から民国国学へと伸びる堅実な学術の延長上であって、ついに『内経語言研究』が公刊され、『内経五運六気学』が出現した。

本邦の黄帝内経『素問』『靈樞』への挑戦もまた熱い期待のただ中にある。漢代研究の長い模索期をへて近時ようやく秦漢出土の竹帛、西漢の際の今古文、漢魏の交の古注群の、いずれも困難ながら緻密な文献研究が進みつつあって、まさにその水準にそと『素問』全篇の翻訳がここに完成した。斯界の活用にあえることを信ずる。



東京大学名誉教授  
戸川 芳郎

## 金匱真言論篇 第四

【解題】 本篇の内容は、四時・陰陽・五行を中心として、人体に関係づけ、発病のしくみを論じ、さらに、人と自然とのさまざまな関係にまで及ぶものである。その中の大部分は学術の上で原則となる問題であり、作者はそれを非常に重視し、また極めて珍しく秘すべきものとして記している。篇名を「金匱真言論」としているのもまた、そういう意味を示すものである。

黄帝問曰、天有八風、經有五風、何謂。岐伯対曰、八風発邪、以爲経風、触五蔵。邪気発病、所謂得四時之勝者。春勝長夏、長夏勝冬、冬勝夏、夏勝秋、秋勝春、所謂四時之勝也。

黄帝問いて曰く、天に八風あり、經に五風ありとは、何の謂ぞや。岐伯対えて曰く、八風、邪を發し、以て経風となり、五蔵に觸す。邪氣、病を發するは、いわゆる四時の勝を得る者なり。春は長夏に勝ち、長夏は冬に勝ち、冬は夏に勝ち、夏は秋に勝ち、秋は春に勝つは、いわゆる四時の勝なり。

【注釈】 ① 五風——「五蔵の風」をいう。肝風、心風、脾風、肺風、腎風のことである。馬師の説「五風とは、つまり八風が傷害するものである。傷られる蔵が異なるので、名もまたちがうのである。」  
② 八風、邪を發す——張志聡の説「八風とは、八方の風である。八風、邪を發するとは、八方の不正な邪風が發して、五蔵の風となり、人の五蔵に触れば、邪氣が内にあつて病を發するのである。」  
③ 勝——克ち制するという意味。  
④ 長夏——夏と秋の間を「長夏」と名づける。つまり、陰曆の六月。

【現代語訳】 黄帝が問う。「自然界の気候には、八風の異常があり、人体の経脈には、五風の病変があるというのには、どういふことであろうか。」  
岐伯が答える。「八風とは自然界の正常でない気候であり、また病を引き起こす要因であつて、それは人体の経脈に影響して、五風を産み出し、五蔵を傷害するのです。邪氣が病を誘発するということは、四時の勝氣を得ることによつてその勝つ所を征服するという関係です。例えば、春は長夏に勝ち、長夏は冬に勝ち、冬は夏に勝ち、夏は秋に勝ち、秋は春に勝つということがございます。これがすなわち、四時の相勝の一般的な規律なのです。」

【解説】 本節は、自然界の気候の変異が、経脈に影響し、臓府を傷害して、疾病を引き起こすことがあるのを説明している。  
古人は、四時を五行に配して、春は木、夏は火、長夏は土、秋は金、冬は水とし、五蔵を五行に配して、肝は

## 様々な人々が 渴望した経典

『黄帝内経素問』、略して『素問』と呼び慣わされているこの書ほど、今日、さまざまの人間によつて取り上げられることの多い古典は、なかなかないのではないだろうか。中医学や漢方医学・薬学を学ぶ人々がこの書を読むのは、最も古く、最も根本的な医学経典である以上、当然のことだが、最近では、こうした専門家以外の人々が、この何千年も前から伝えられた書物のことを、熱心に語りはじめている。

その中には、近現代の医療に不信を抱いて、身近な伝統医学である中医学や漢方を学びはじめ、その原点としてのこの書を知った人もいる。また、医療や健康も言わず、等身大の人間を考えるための、全く新しい思考方法を探し求めた末に、ひとつならぬのシステムとして人をとらえるこの書の思想に魅せられた人々もいる。物質の世界を極限まで追つてきた末に、それが「心」と不可分な世界であることを認識し、そうした「心」の領域を扱いつつ「医学の知」こそ、来たるべき未来社会を開くものだと、この書物に注目している人々もいる。更に、言葉ではなく、身体によつて確め、知りうるさまざまな世界を探った末に、そうした知が集積されているこの書の「言葉」に、再び戻つてみた人々がいるのである。

(監訳者のついでに) 石田 秀実